

「パウロ、ローマに向かって出港する」

2016年10月05日

使徒言行録 27章 1節～12節 わたしたちがイタリアへ向かって船出することに決まったとき、パウロと他の数名の囚人は、皇帝直属部隊の百人隊長ユリウスという者に引き渡された。わたしたちは、アジア州沿岸の各地に寄港することになっている、アドラミティオン港の船に乗って出港した。テサロニケ出身のマケドニア人アリストアルコも一緒であった。翌日シドンに着いたが、ユリウスはパウロを親切に扱い、友人たちのところへ行ってもてなしを受けることを許してくれた。そこから船出したが、向かい風のためキプロス島の陰を航行し、キリキア州とパンフィリア州の沖を過ぎて、リキア州のミラに着いた。ここで百人隊長は、イタリアに行くアレクサンドリアの船を見つけて、わたしたちをそれに乗り込ませた。幾日もの間、船足ははかどらず、ようやくクニドス港に近づいた。ところが、風に行く手を阻まれたので、サルモネ岬を回ってクレタ島の陰を航行し、ようやく島の岸に沿って進み、ラサヤの町に近い「良い港」と呼ばれる所に着いた。かなりの時がたって、既に断食日も過ぎていたので、航海はもう危険であった。それで、パウロは人々に忠告した。「皆さん、わたしの見るところでは、この航海は積み荷や船体ばかりでなく、わたしたち自身にも危険と多大の損失をもたらすこととなります。」しかし、百人隊長は、パウロの言ったことよりも、船長や船主の方を信用した。この港は冬を越すのに適していなかった。それで、大多数の者の意見により、ここから船出し、できるならばクレタ島で南西と北西に面しているフェニクス港に行き、そこで冬を過ごすことになった。

パウロはローマに護送されることになった。数人の囚人たちと、パウロの友人たち、テサロニケ出身のアリストアルコなども同行した。皇帝直属部隊の百人隊長ユリウスが護送の任に当たった。アドラミティオン港の船に乗って、カイサリアを出港し、翌日、シドンについた。ユリウスは、パウロを親切に扱い、シドンのクリスチャンを訪ね、もてなしを受けることを許した。シドンを出港し、向かい風を避けるため、キプロス島の北を航行し、リキア州のミラに着いた。トルコ南岸の地中海を航行したのである。ユリウスはミラでローマに行く船を見つけ、パウロたち一行を、その船に乗り換えさせた。ミラを出港したが、幾日も、船足ははかどらず、トルコの西海岸のクニドス港に近づいたところでまたもや、風に行く手を阻まれたので、南下し、クレタ島の東のサルモネ岬を回って、島の南海岸沿いを進み、ようやく「良い港」と言われていた港に着いた。そこで幾日か過ごした。地中海は美しい海であるが、9月を過ぎ、翌年の3月頃までは、海が荒れる。その前兆のような、風に翻弄される航海であった。時は、断食日が過ぎていた。現在の9月半ばか10月の半ばである。航海は、既に危険な時に入っていた。パウロは「皆さん、わたしの見るところでは、この航海は積み荷や船体ばかりでなく、わたしたち自身にも危険と多大の損失をもたらすこととなります」と警告した。ところが、ユリウスはパウロの警告を聞かず、船長や船主の言い分を聞き入れた。「良い港」は、その名とは違い、冬を越すのに適していなかった。大多数の意見によって、クレタ島の南西にあるフェニクス港を目指し、そこで冬を過ごすことにした。

パウロはコリント書（二）11章25節bに「難船したことが三度、一昼夜海上を漂ったこともありましたが」と書いている。もちろん、この航海の前の経験であるが、パウロは冬の地中海の嵐の怖さを知っていたのであろうか、パウロの警告通りになった。